



1945年

63歳

巣鴨から便り

第四章 想いは時代を越えて

邦彦は拘置所の中でも決して動搖することはありませんでした。

人にはそれぞれの時代に
果たすべき役割がある。

私は当然なすべきことを
してきたに過ぎない――

それが悪いのであれば、
喜んで罪に服そう。

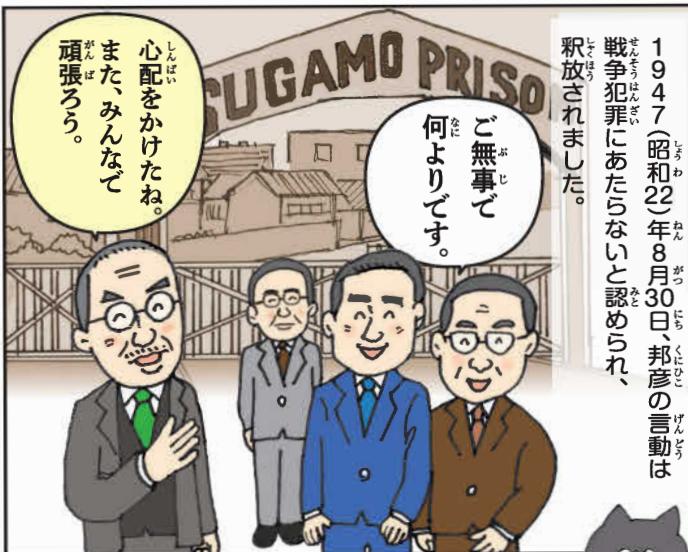
邦彦は拘置所から、残された家族や心配する研究所の人々へ、今自分の
思いを毎週手紙に書いて送りました。

1

巣鴨拘置所からの手紙



邦彦の一日も早い釈放を実現するため、研究所員の牟田直が中心となつて、無罪を証明する調書を作り、提出しました。



1947(昭和22)年8月30日、邦彦の言動は
戦争犯罪にあらないと認められ、
釈放されました。



1948年

65歳

五輪堂の設立

しかし、戦後の混亂で運営は苦しく、給料の支払いにも困るほどでした。そこで邦彦は研究所員たちと、図書館用品を販売する会社「五輪堂」を設立します。

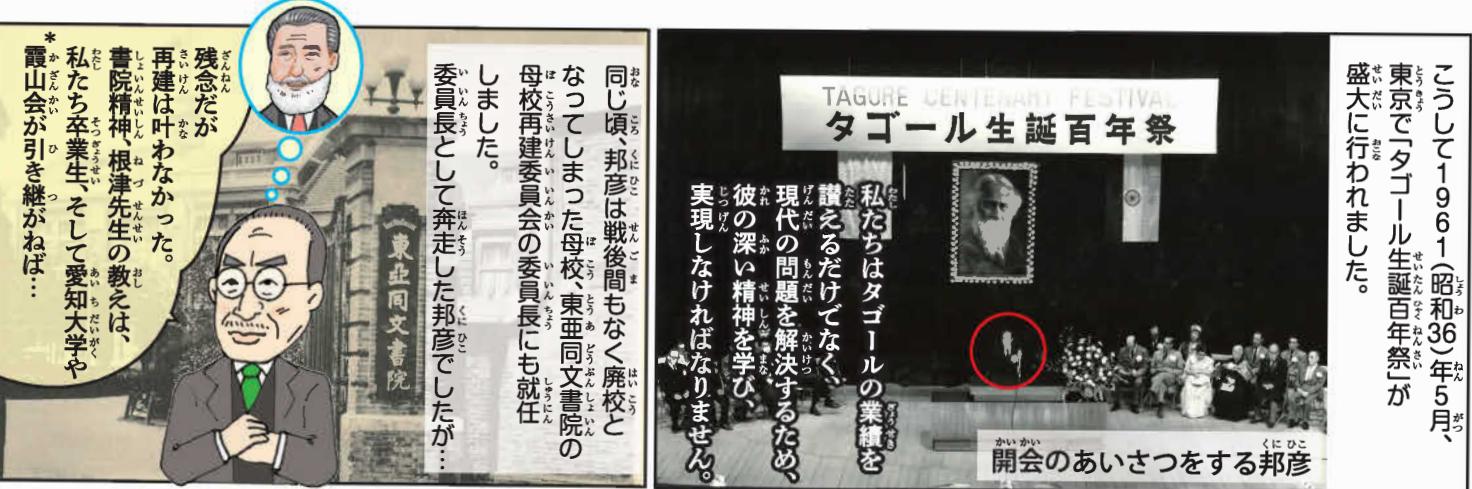
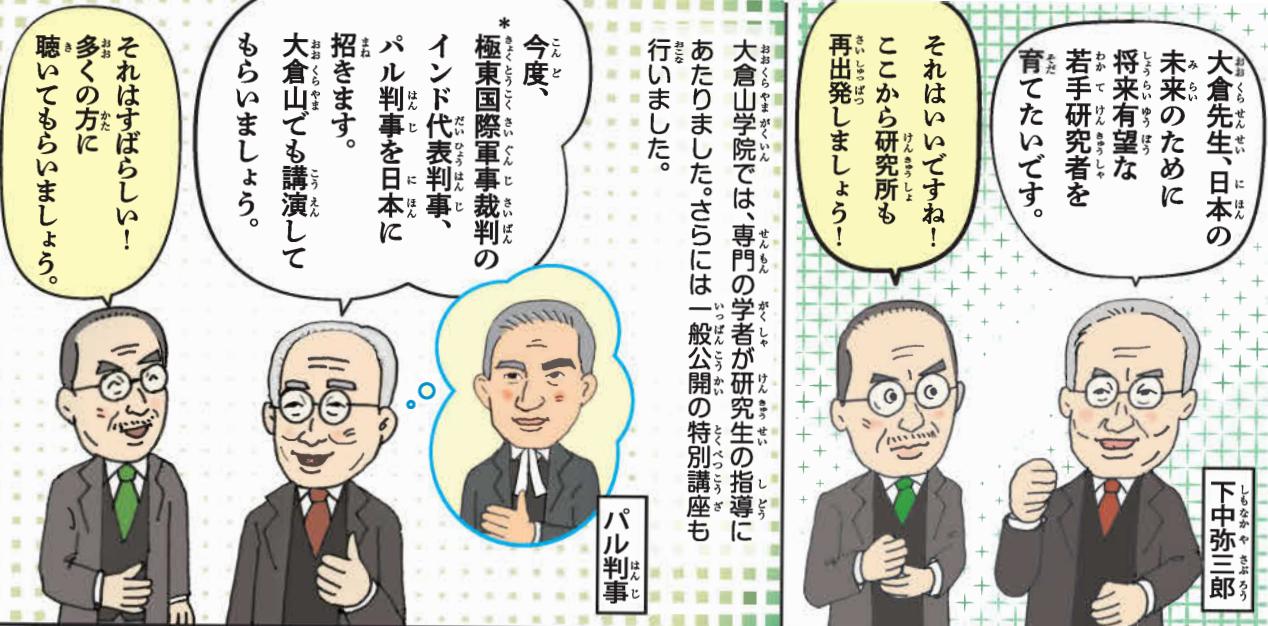


では、支部図書館にして
黒川太郎の図書館には
いい本が揃っているが、
このままでは潰れてしまふかも知れない。

また研究所の図書館も財政的に運営が難しくなり、1950(昭和25)年に、
国会図書館の支部として管理運営されることになりました。



1952(昭和27)年、邦彦は研究所の理事長に復帰すると、平凡社社長の下中弥三郎へ依頼しました。そして、「大倉山学院」を新設し、研究者の養成に取り組みます。



* 極東国際軍事裁判:連合国が政治、軍事指導者の戦争責任を裁いた軍事裁判。「東京裁判」とも呼ばれます。

* 霞山会:東亜同文書院を設立した東亜同文会の後継団体。今も日本とアジア諸国の親善を目的として活動しています。

1959(昭和34)年

研究所の名称を大倉精神文化研究所に戻しました。当時は日米安全保障条約の改定をめぐり、連日テモ隊が国會議事堂を取り囲むなど、騒然とした社会情勢でした。

大倉精神文化研究所

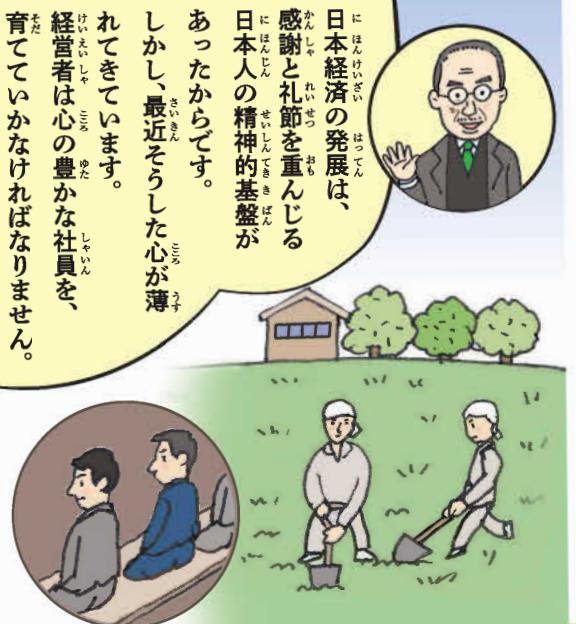
この国の将来が心配だ。
今こそ研究所設立の精神に立ち帰って、何をすべきか、考えなければならない。

1962(昭和37)年、研究所は創立30周年を迎えた。
邦彦は節目にあたつて、自分の考えを発表しました。



科学文明は進歩し続けているが、
精神文化の方はずっと足踏みをしている。
このままでは真の豊かさがわからなくな
なつてしまふ。

研究を重ね、その成果を
社会に発信していく必要がある。



一方、急速な経済成長を遂げた日本では、社員教育が注目されるようになつてきました。
宿泊設備や修養道場を兼ね備えた研究所で、邦彦らの指導による研修を希望する会社も徐々に増えてきました。



しかし、一万坪近くあつた研究所の土地も、その三割を売ることになった。
いました。

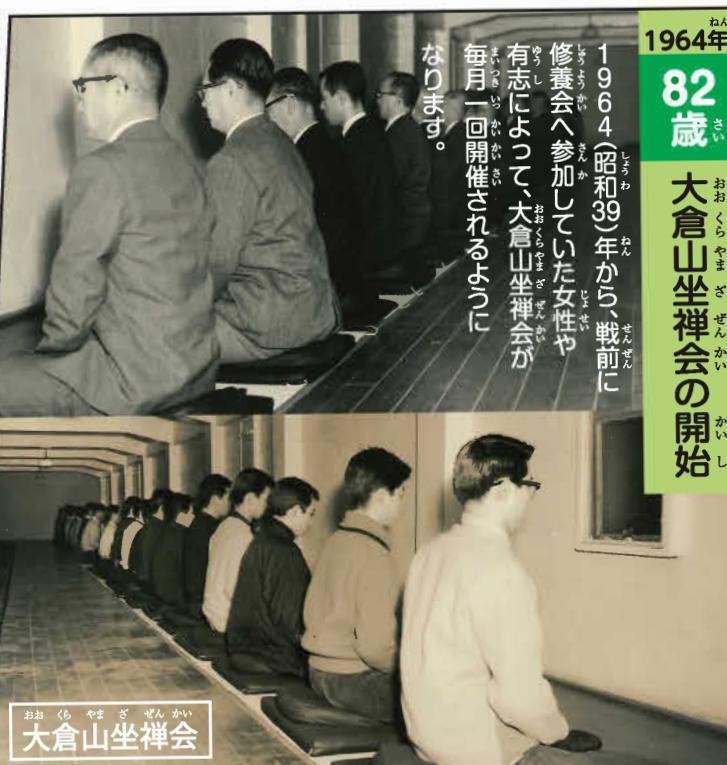
研究所では、1965(昭和40)年に「日本思想史文献解題」を刊行、続いて明治維新の精神の研究を始めました。

1964年

82歳

大倉山坐禅会の開始

夏には、一泊坐禅会も開かれました。
朝食後は作務として庭の清掃と草取りを行います。
参加者の多くは大企業の経営者でした。



なるほど…。

坐禅も大切ですが、
日常生活や
こうした作業を、
坐禅の時と
少しも変わらない
心構えて取り組むことが、
もっと大切です。

日本能率協会会長 森川覚三

*作務:禪宗の修行の1つで、掃除や料理など日常生活での労働のことを言います。

この頃の邦彦は朝、東京世田谷の自宅から車で研究所にやつてきて、所長としての仕事を終えると読書か揮毫、来客があれば自ら研究所内を案内したりしていました。



来客がなければ午後は作業服に着替え、箒や鎌を手に、研究所の庭の清掃や草取りをします。作業着のまま車に乗って帰ることもあったので、車内は泥で汚れていますが、邦彦は全く気にかけませんでした。

年老いてきた邦彦でしたが、まだやり残していることがたくさんありました。そこで世田谷の自宅を売り、大倉山に引っ越しすることを決めます。

ここまで考えて
くださっているなんて…

残り短い人生を
研究所に全て捧げたい。
研究活動を続けるにも、
私の寄付と土地の
切り売りだけでは
限りがある。研究所の
土地を私が購入すれば、
人々の研究費の
足しにもなるからね。

1971年 89歳 生涯を閉じる



しかし、その魂は
大倉精神文化研究所本館、
現在の大倉山記念館の
地下深くに埋められた
留魂碑とともにあります。

しかし、大倉山で新居の建築が始まつて間もなく
邦彦は病に倒れてしましました。

長い間、世のため、人のためと思って、いろいろやつてきました。



人は何をやつたか
ということよりも、
何を遺してきたかが大事だ。
私の想いは今は理解されないかも知れない。
しかし、この研究所が続いていれば、
いつかきっとわかつてもらえるだろう。

心豊かな人を育て、よりよい社会をつくりたい、
その想いを生涯貫き通した邦彦の精神は、
大倉精神文化研究所をはじめ
さまざまな団体や関係者によつて
現代、そして次の世代へ脈々と受け継がれてています。



みなさん！

おおくらくにひこ
むかし、「大倉邦彦」という人がいたことを
し
知っていただけましたか？

くにひこつぎことばのこ
邦彦は、次のような言葉も残しています。

よためたたがや
世の為に田を耕す

のうかひとたたがやじぶんた農家の人が田を耕しているのは、自分で食べるためではありません。

よなかひとたじぶんたながいこうさくつづ世の中の人に食べてもらうためです。自分も食べているのは、長生きして耕作を続け、いつまでも他の人に食料を届けるためです。

わたしたとえどじくぎょうこころがましごと私たちには、たとえどのような職業についたとしても、そのような心構えで仕事をしたいものです。

“田を耕すこと”とは、今風に言えば“ライフワーク”(この世で果たすべき使命、生きる意味)でしょうか。

くにひこたたがやなんでは、邦彦にとって“田を耕すこと”とは何だったのでしょうか？

くにひこじしんじぶんこころゆたひとそだ邦彦自身は、自分のライフワークは、“心の豊かな人を育てる”ことであり、そのためには生を受けたのだと考え、生涯をかけてそれを実践しました。

あなたにとって、“田を耕すこと”つまりライフワークとは
なん何でしょうか？

さまざまなものから、たいくんとおじさんじぶんじしん様々な学びと体験を通して、自分自身のライフワークを見つけてください。そしてそれを実践してください。

